

# 組織キャンプの先駆者小西孝彦が残したもの

石 田 易 司

キーワード：組織キャンプ，アサヒキャンプ，障がい児キャンプ，  
フレッシュエアータント，創造と協同

## 目次

1. 小西孝彦が残したもの
  - ①アサヒ型テント，フレッシュエア型テント
  - ②「キャンプカウンセリング」「組織キャンプ」
  - ③物語
  - ④障がい児者キャンプ
2. 小西孝彦の略歴
3. 小西が創ったアサヒキャンプ
4. まとめに代えて～小西の言葉
  - ①キャンプは善意のムーブメント
  - ②組織キャンプのモットー
  - ③キャンプのプログラムとは
  - ④キャンピング フォー オール
  - ⑤キャンプの安全
  - ⑥キャンプの食事はスローフード
  - ⑦キャンプカウンセラーのリーダーシップ
  - ⑧キャンプ長の仕事は未来を見ること

## 1. 小西孝彦の残したもの

2015年12月、小西孝彦が死んだ。その人を知っている人は、キャンプをしている人の中でもごく限られた少数の人だろう。彼がアサヒキャンプのキャンプ長として直接キャンプの世界に関わったのは1953年から63年のわずか10年でしかなかった。しかも、アサヒキャンプという狭い世界の中でのことでしかない。しかし、この短い間に、ともにキャンプをした人達の心には、大きな印象を残した人だった。

また、一緒にキャンプをしたことのない人でも、そして、小西の名前は知らなくとも、たとえば、少年時代ボーイスカウトの活動に参加した人や、学校キャンプに参加した人の記憶に残っているはずの、カーキ色の帆布を使った家形テントや、クラスの男子や女子がそれぞれ一つのテントで眠れる大きなフレッシュエア型テントを、初めて日本に導入した人が小西孝彦である。

私が初めてキャンプの世界に飛び込んだ1960年代、キャンプカウンセラーとして勉強しようとしたとき、参考になる本を探してその少なさに多くの人が戸惑ったことだろう。1967年にベースボールマガジン社からミッチェルとクロフォードが書き、兼松保一氏が訳した「キャンプカウンセリング」という本が出版され、当時のキャンプリーダーにはまさにバイブルのような存在になるのだが、小西孝彦はその前年、66年に「キャンプカウンセリング」という本を、67年には「組織キャンプ」という本を出版している（いずれも朝日新聞大阪厚生文化事業団）。商業出版されたわけではないので、それを見た人は限られているだろうが、持っている人はまさに宝物のように大切にしてきたはずだ。私の手元にも先輩から譲られた、ぼろぼろの表紙で、中には線や書き込みがいっぱいされた、汚いその本があり、今も私の心の中で大切にされている。

また、その後、キャンプや障がい者福祉などの研修会や講演会で小西が

語った話も、形ではないけれど、多くの人の心に深く残っている。冷めてしまったカレーライスが、とてもおいしかったという日本で最初の障がい児キャンプのエピソードや、先に書いた家形テントを作った時の話だ。

この障がい児キャンプは、今でも各地で、様々な団体の手で実施されている。竹内靖子の調査では、大阪市内の特別支援学校、社会福祉施設、NPO/ボランティア団体などの手で、2014年夏には60団体も実施している<sup>1)</sup>。この障がい者キャンプの最初に仕掛け人の一人が小西孝彦だった。

戦後の関西で、まさに先駆的なキャンプの世界で、こうした様々な事績を作ったのが小西孝彦なのである。

ではその一つひとつのことをもう少し深く振り返ってみよう。

## ①アサヒ型テント、フレッシュエア型テント

1953年、小西孝彦がその創設に関わったアサヒキャンプでは、当時、その道具のほとんどを米軍や日本軍から払い下げられたキャンプ用具を使用していた。道具のほとんどが軍隊使用のものだったので、色はほとんどが目立たないカーキ色一色であった。

私が初めてアサヒキャンプに参加したアサヒ志摩キャンプセンターの倉庫の奥から、昆虫採集で使うような細いガラス容器がたくさん出てきた。英語の読める仲間が説明を読むと、死体の脇に挟んで、個人が識別できるように名前などを入れておく容器だった。

こんなふうに、テント、毛布、飯ごう、なべなど、いろんなものが軍隊の払い下げ品だった。



1) [知的・発達障がい児・者キャンプの意義と可能性に関する実証的研究][科研費]

前ページのパンフレットは1953年、アサヒキャンプが初めて大阪府と奈良県の県境、生駒山上で開設された時のパンフレットだが、見てわかる通り、テントは三角テントである。移動に大切な軽さ、冬季使用に必要な暖房効率、風対応などを考えると、この三角テントは合理的である。

しかし、夏季だけ使用する、また定住型のキャンプでは、この三角テントが不自由で使いにくいのは当然である。暑いし、立って生活することができない。低い屋根で高さのない部分は物置にもならない。

そんな1953年、ヘミングウェイ原作、グレゴリー・ベック主演の一本の映画が世界中で大ヒットした。「キリマンジャロの雪」である。アフリカのサバンナを探検する小説家の話である。けがをして、ベースキャンプから動けなくなって救援を待つ、そのテント生活が冒頭に出てくる。映画を見て、小西はそのテントに釘付けになった。それまで日本では見たこともない



「ウォール」のある家型のテントだ。ビデオのない時代、小西はその映画の冒頭の場面だけのために3回も4回も見て、図面を描き、サイズを測った。これが北口山スキー研究所<sup>2)</sup>の手で商品化される。

- 2) 北口山スキー研究所 大阪市北区にあった登山やスキーの専門店。北口礼吉氏が創設し、2000年代はじめに、高齢のため閉鎖した。私もこの店でさまざまなキャンプ用品を購入していたが、リュックも、登山靴も糸が古くなってきたら、無料で修理してくれた。子どもの移動キャンプで一人用テントが必要だといったら、一緒に設計図を引いて、いくつかの試作品を作ってくれた。

しかし、一生ものを売りにしていたため、高齢者は一度買ったものは2度買うことはなく、若い人が登山やスキーをしなくなって、また、店主の高齢もあって、店は閉鎖された。北口礼吉氏は2004年、日本キャンプ協会キャンピングアワードを受賞されている。

そして、アサヒキャンプだけでなく、ボーイスカウトなどでも定住型のキャンプで使用するテントのモデルとして日本中に普及するのである。

また、小西は1956年、朝日新聞厚生文化事業団創設50周年事業の一環で、アサヒキャンプカウンセラー卒業生で大阪府野外活動協会職員の吉水泰彦と48日間、アメリカのキャンプの視察に出かける。その結果が次の項に出てくる「組織キャンプ」としてまとめられるのだが、その中に印象的な項目がある。

ニューヨーク・ヘラルド・トリビューンという新聞社が、スラムの子どもたちに新鮮な自然の空気をと、「フレッシュエアキャンプ」という社会事業的な視点を持ったキャンプを実施している。その時に使用しているテントが、日本での学校キャンプなどに向いていると、日本に持ち込むのである。これも北口山スキー研究所の手で商品化され、各地に広がっていくのだ。1クラスの男女およそ20人が一緒に生活できる広さ。テント台があるので、雨や湿気に強い。ウォールがあるので、立って生活できる。1シーズン中、建てたままで管理できる丈夫さなどが、このテントの特色だ。学校キャンプ中心に普及してきた日本のキャンプではまさにヒット商品だろう。

## ②「キャンプカウンセリング」「組織キャンプ」

1966年、小西は「キャンプカウンセリング」という本を書く。63年、小西は朝日新聞内の厚生文化事業団から印刷局に異動になるのだが、キャンプの現場を離れたこと、勤務時間が深夜に及ぶことなどで時間ができたことなどが理由で、これまで活動してきたことをまとめようとする。キャンプディレクター10年の活動のまとめである。

神戸YMCAで、関西学院大学社会学部で今



井鎮雄から学んだグループワークの理論と、アサヒキャンプでの実践を整理した小冊子である。

その時、アサヒキャンプでキャンプ長をしていた佐野信三がその出版に大きな役割を果たしたことが、前書きに出てくるが、彼も同志社大学で大塚達雄からグループワークを学んだのだから、内容はもしかしたら二人の合作といえるのかもしれない。

アサヒキャンプでは、それまで日本のキャンプをリードしていたボーイスカウトやYMCAが使用していたキャンプリーダーという用語を使用せず、キャンプカウンセラーといていたが、まさにリーダーではなくカウンセラーだと、グループワーク、カウンセリングの理論をキャンプに応用した著作だった。

また、翌年、小西は「組織キャンプ」を出版する。これは吉水泰彦との48日間のアメリカ珍(?)道中日記なのだが、自身が実践してきたアサヒキャンプと最新のアメリカのキャンプ事情を整理した本である。まさに小西が理想とする組織キャンプのあり方を論じている。

この二つの本の意義は、先にも書いた兼松訳の「キャンプカウンセリング」に先行する日本で最初の組織キャンプを論じた本であること。また、それまでアメリカのキャンプ理論でしかなかったキャンプ本を、日本の実践と交わらせた、日本のキャンプの本だということ。また、そのことによって、体験でしか語れなかったキャンプをグループワークやカウンセリングというソーシャルワーク論で理論化したことである。



## ③物語



小西孝彦は文章を書くのが得意だった。小西の文章は理論的でもあったが、人に理解してもらおうと思ったとき、具体的な事実の上に物語で色づけて、誰にとっても分かりやすい、象徴的なストーリーを作り上げることが、まさに名人芸のようだった。

左の冊子は、大阪府キャンプ協会が主催し、2日間に渡って小西自身のキャンプ人生を語ってもらったものをテープに起こし、整理したブックレット

だが、そうした物語であふれている。

小西自身も何度も語っているのだから、形式的な物語になりきっているのだが、日本で最初の障がい児キャンプを象徴する「冷めたカレーライス」の話はそのことを雄弁に語っている。

歩くことのできない脳性まひの少年が1週間かかって、テントサイトから坂道の上にある食堂へ自力で行くのを、他のメンバーがじっと待っていた結果、おいしいカレーライスがさめきってしまったというのである。しかし小西は、そのカレーライスがこれまで食べた中で一番おいしいカレーライスだったというのである。

次ページの写真は、小西が最初にキャンプ長をしたアサヒ志摩キャンプセンターの航空写真だが、新婚旅行の時に新妻をほったらかしにして、ホテルの窓から見えたこの島を、モーターボートを借り切って、何周もして、これこそ私たちのキャンプ場だと決めたというのだ。私たちのキャンプ場が誕生した、まさに秘話なのだが、奥様はそんなことはなかったと、軽く否定され

ていた。

社会福祉界では「岡村理論」を打ち立てた、伝説の人岡村重夫氏がこの島に来られた時、目隠しをして障害物を超えていくゲームをして、岡村氏が障害物を記憶した後、目隠しをしてそ



れを乗り越えていくとき、全部の障害物を取り除いてしまい、何もない平地をまるで障害物があるがごとく、足を上げ、回り道をして歩いて、それをみんなが大笑いしたのを知って、激怒した話など、誰が聞いても、いつ聞いても大笑いものだった。

物語をもう一つ。アサヒキャンプではキャンプ場の地元の人を大切にしてきた。必要があれば地域の人を雇用し、地域の商店からものを購入する。

アサヒ志摩キャンプセンターでは野菜は鵜方にある森口商店から買っていた。注文の品をファクスで送り、毎日午後2時に賢島港に船で取りに行く。お盆も日曜日も関係なく、7月8月の2か月間、毎日、ご夫婦で軽トラックを運転して届けてもらう。

その森口商店の家族がそろって、絶対に食中毒を出さないように、食品のチェックは言うまでもなく、毎日梅干を食べて、夏の間病気しないように、細心の注意をしてくれているというのである。

この話をしながら、小西は、だから私たちも最新の注意で食事を作り、キャンパーに提供しなければならないと私たちに説くのである。

#### ④障がい児者キャンプ

先のカレーライスの話で出てきた、私たちキャンプ仲間の間で有名な話は、日本で最初の障がい児キャンプの成立のことだ。整形外科医水野正太郎



と神戸YMCA主事の今井鎮雄の間でまとまった障がい児の1週間のキャンプを、小西が橋渡しをして、朝日新聞がスポンサーになり、神戸YMCA余島キャンプ場で開かれることになった。翌年には当時的大スター森繁久弥がキャンプ中にヨットで訪れるというハプニングがあったし、カレーライスの主人公西村雄三さんが、のちに足の指の間に絵筆を挟んで描く画家になって、障がい者の自立の象徴のような存在になり、余島キャンプのメインホールに100号のバラの絵を寄贈することになるなど、話題が尽きないこのキャンプの仕掛け人が小西だったのである。下の写真はその時のもので、2015年12月の小西の死の数日前に、当時のキャンプカウンセラーとキャンパーが、60年後に、あれはいったい何だったのかという回顧をする講演会のチラシに使われた<sup>3)</sup>。



私もその講演会に参加したが、「この時私は障がい児から一人の少年になった」と語った参加者・片岡實は、大人になって障がい者福祉の仕事に携

---

3) 2015年11月29日、はんしん自立の家。1953年肢体不自由児キャンプから学ぶ「人間の尊厳とは何か」神戸YMCA主催。

わる。そのパートナーに小西を選び、彼が理事長を務めるひょうご障害福祉事業協会の、小西は理事や監事をずっと続けることになる。

2016年3月に開かれた「小西孝彦さんに学ぶ会」（主催・大阪府キャンプ協会ほか）の中で片岡は次のように思い出を語っている。

1953年夏、神戸YMCAと朝日新聞厚生文化事業団が小豆島（余島）で日本で初めて「小児まひの子どもキャンプ」を開き、私は9歳で参加したキャンパーの1期生で、小西孝彦さんは朝日新聞社のスタッフとして参加されていました。キャンプは子どもたちに、障がい児ではなく、一人の子どもとして、自信と勇気を持たせてくださいました。

## 2. 小西孝彦の略歴

こうしたキャンプ史上華々しい活躍をした小西は、いったいどんな経歴で、キャンプに触れ、日本のキャンプに次から次へと新しい風を吹かせることができたのだろうか。

記録にない略歴をご子息、朗さんの確認で作成してみた。

1931年 西宮市の高級住宅街仁川地区で、小西作太郎氏の次男として誕生。  
（作太郎氏は朝日新聞元常務で、高校野球の生みの親として有名。  
第1回大会の始球式をする）

1949年 関西学院大学社会学部入学、社会福祉専攻。神戸YMCAのキャンプボランティアとして活躍。今井鎮雄氏にグループワークを習う。  
元関学アメリカンフットボール部監督として有名な武田建氏と同級生。ソーシャルワークの研究者としても有名な彼を小西は「ケンちゃん」と呼んでいた。

1953年 同大学を卒業と同時に朝日新聞社入社。厚生文化事業団配属。アサヒ生駒山キャンプ場の創設に関わる。  
アメリカ映画「キリマンジャロの雪」を見て、家型テントの設計。  
日本のキャンプの普及に貢献。

1957 年 アサヒ生駒山キャンプ場キャンプ長。

新婚旅行で三重県英虞湾内の多徳島に出会い、この島をキャンプ場にと決意。

1959～63 年 アサヒ志摩キャンプセンターキャンプ長。

多くのキャンプカウンセラーを育てる。

1963 年 朝日新聞大阪本社印刷局へ異動

1966 年 「キャンプカウンセラー」, 発刊

1967 年 吉水泰彦と 48 日間のアメリカキャンプ視察。日本で最初の公立キャンプ場, 大阪府立総合青少年野外活動センターの設立に貢献。

「組織キャンプ」発刊

1976 年 朝日新聞 100 周年記念事業として, 滋賀県朽木村（現高島市）に「朝日の森」設立を提案, 担当。アサヒキャンプ朽木村設立に協力

1985～88 年 朝日新聞大阪厚生文化事業団事務局長。

この間, 日本キャンプ協会理事, 関西で組織キャンプの理論研究をする「組織キャンプ研究会」メンバー, 大阪府キャンプ協会設立にかかわる。宝塚市社会教育委員など歴任。

2015 年 12 月 永眠。

以上が小西のキャンプに関わる略歴である。

### 3. 小西が創ったアサヒキャンプ

小西のキャンプの活躍の場の中心はアサヒキャンプだった。また, そこにこだわって, 人生を過ごしてきたことも間違いのない事実だと思う。小西個人の目に見える事績は第 1 章で示したが, それらの集大成ともいえるアサヒキャンプは何を残し, 小西の影響は何だったのだろうか。

### アサヒキャンプ60年の足あと



小西のアサヒキャンプへのこだわりは大きく、二つあると思う。

一つは、小西の後任のアサヒ生駒山キャンプセンターのキャンプ長を務めた戸室常一が、小西に「キャンプ長として一番大切なことは」と聞いたとき、間髪を入れず、「キャンプカウンセラーを育てること」（前掲「小西孝彦さんに学ぶ」）といったように、人材の育成に心血を注い

だことだろう。

アメリカ大陸への視察旅行を共にした吉水泰彦をはじめ、戸室常一、佐野信三、谷川俊一、畠中彬、石田易司、中村茂高など、小西の薫陶を受けて大阪府キャンプ協会の理事を務めたメンバーも7人に上るし、岡本民夫、東山紘久、小田兼三、日高正宏など、教育、心理、福祉関係で大学教授を務めたメンバーも多い。福祉施設や青少年施設、学校などの現場で働いたキャンプカウンセラー卒業生は数知れない。

上の冊子はそうした小西の作ったアサヒキャンプが60年を迎えたときの記念誌である。小西の教えを受けたキャンプカウンセラーたちが自分たちで作った。

また、小西がアサヒキャンプに気持ちを込めたもう一つの特徴が、日本で最初の障がい児キャンプをはじめ、日本で最初の数々のスペシャルニーズキャンプを実施したことである。

私も小西に言われたけれど、新聞社がキャンプをしている意味は記事になるキャンプを実施することにある、と。

中島豊<sup>4)</sup>が日本キャンプ協会主催の第1回日本キャンプミーティングで、戦後の日本の組織キャンプの歴史の中のスペシャルニーズキャンプの初出を発表した時、そのほとんどがアサヒキャンプであったことに大きな驚きを禁じ得なかった。

日本で最初の市民に開放された組織キャンプ「アサヒ生駒山キャンプセンター」の開所、文部省主催のキャンプ指導者養成講習会<sup>5)</sup>をはじめ、下記の記録のように、様々な対象のキャンプがアサヒキャンプで実施されている。

## アサヒキャンプの挑戦

- |                      |                        |
|----------------------|------------------------|
| ・ 1953 肢体不自由児キャンプ    | ・ 1981 不登校児キャンプ        |
| ・ 1953 生活保護児キャンプ     | ・ 1983 在日ベトナム難民子どもキャンプ |
| ・ 1958 知的障害児キャンプ     | ・ 1983 中国帰国者キャンプ       |
| ・ 1960 非行少年キャンプ      | ・ 1985 ハンセン病療養所キャンプ    |
| ・ 1961 ぜんそく児キャンプ     | ・ 1992 学習障害児キャンプ       |
| ・ 1971 公害地区の子どものキャンプ | ・ 1993 認知症高齢者キャンプ      |
| ・ 1972 サリドマイド児キャンプ   | ・ 1993 精神障害者キャンプ       |
| ・ 1978 自閉症児キャンプ      |                        |

上の表は中島の表にアサヒキャンプの年報「創造と共同」を元に、石田が付け加えたものである。このほかにも、盲児キャンプ、中卒の勤労青少年キャンプ、保育学生キャンプ、障がい児と健常児の統合キャンプなども行われている。

ここでも小西は物語を作る。

最初の生活保護家庭児キャンプの時、「キャンプ長の仕事は彼らにご飯を腹いっぱい食わせること」と。米が配給制の時代、一般のキャンプではみんな自分の食べる米を持参するのが当たり前だった。それができない子どものために、麓の農家を一軒一軒回って、米を分けてもらえるよう交渉すること

4) 1997年5月、国立オリンピック青少年センターで開催。「日本における量育キャンプの歴史」中島豊〔弘前学院短期大学〕

5) 1955年、文部省主催「全日本教育キャンプ指導員中央講習会（西日本会場）」（「先駆」朝日新聞大阪厚生文化事業団55年の歩み1984年5月）

が、キャンプ長の仕事だったと。そして、子どもたちがお代わりをするときの満足げな表情を見て、自分のしたことが報われたと言い切る。

アサヒキャンプカウンセラー6期生の岡本民夫は盲児たちのキャンプをしたとき、自分の好きな夕日のきれいな場所へ子どもたちを連れて行って、「きれいな夕日」を見せた。そのとき、彼らの目が見えないことに気付く。自分の失敗に気付かされ、落ち込みそうになった時に、全盲の少年が「きれい」と同調してくれたことで救われる。全盲といっても光は感じる彼は、オレンジ色の世界がちゃんと「見えていた」のだ。

そんな話を通じて、小西はアサヒキャンプが何をするところなのか、カウンセラーの仕事は何かのかを私たちに語り続けた。

カウンセラーの育成とスペシャルニーズキャンプへのトライが小西のアサヒキャンプにおける二つの大きな主張だったと言えるだろう。

こうした小西の、青少年を育てる、あるいは障がいがあるだろうと病気があろうと、すべての人にキャンプを提供するという思想は、どこから生まれてきたのだろうか。

学生時代からの同級生で、ともに関西の組織キャンプの発展に尽くしてきた井上都史弘によれば、元神戸YMCA総主事の今井鎮雄氏、頌栄学院大学初代学長で女子教育に携わった横田栄三郎氏、あるいは育った関西学院などのキリスト教精神に大きな影響を受けていた。

アサヒキャンプのその志は、小西の後を継いだ戸室、佐野両キャンプ長の手で間違いなく小西の目指したものが実践され続けてきた。

#### 4. まとめに代えて～小西の言葉

最後に、小西の著述や語った言葉の中から、印象に残る言葉を挙げて、小西のキャンプへの思いをまとめておこう。

「小西孝彦さんに学ぶ」の中に、アサヒキャンプカウンセラー11期の畠中彬さんが様々な小西の文章からまとめたものをさらに整理し、私自身が小

西から直接聞いた言葉を加えてみた。

### ①キャンプは善意のムーブメント

伝統には永遠の生命を持った部分と、時代とともに変わる部分があります。当初の目的ややり方のすべてを、今のキャンプは受け入れることはできない。永遠の伝統は守り、その上にその時に社会が要求しているものを加えてこそ、今の組織キャンプであると言えます。

キャンプの変わらない伝統とは、自然の中で集団の生活することによって、青少年を心身ともに健康に育てようとする善意の運動（ムーブメント）であり、何らかの教育的意図を持っていることです。

### ②組織キャンプのモットー

アサヒキャンプのモットーは「Creativity & Cooperation」です。「創造と協同」と言っています。キャンプというのは多くの人たちが寄り集まって、新しいものを生み出していく力をつけるというのが私たちの最初のキャンプの目指したものでした。

テントも何もないところで生活するためにはお互いに知恵を出し合い、力を合わせないと何もできない。知恵を出し合い、協力することで楽しいキャンプができる、それが組織キャンプです。

### ③キャンプのプログラムとは

キャンプのプログラム技術は、キャンプスタッフの目に見える技術として強調されてきました。だから従来のキャンプの本は「プログラム技術の本」でした。キャンプの中でプログラムが重要であることは当然ですが、プログラムはキャンプの目的を達成するための手段であり、過程です。

いかにキャンプのプログラム活動の種類が豊富で、内容があって、楽しいものでも、そのキャンプの目的を見失ってはなりません。

また反対にキャンプの目的により早く、より高く近づくためには、キャンプのプログラム活動こそ大切だと言えます。

#### ④キャンピング フォー オール

私は学生時代のYMCA、さらにアサヒキャンプで通算30年間キャンプをしました。その中心課題を一つだけ挙げるとしたら、どんな子どもでもキャンプができるようにすることでした。

私たちの若い時代は子どもの障がい隠すのが普通でしたから、障がい児をキャンプに連れ出すというのは大変なことでした。

そんな子どもたちがキャンプに参加できるようにするための30年だったと思います。その間、約30万人の子どもたちが私たちのキャンプに参加しましたが、そのうちの1割、3万人が障がいを持っていたことが、私の誇りです。

#### ⑤キャンプの安全

水泳プログラムの遊泳可能なゾーンは、毎日変化します。水泳のゾーンを決めるのは、その日、その時のスイミングリーダーで、自分の責任で安全に泳がせることのできる範囲を決めます。その日のスタッフの人数、遊泳者の人数と能力、潮の干満、気温や天候によって、遊泳ゾーンは毎日変わるのが当たり前です。

アーチェリーでは弓の弦をカウンセラーがもっていきます。

このように、「安全か」という質問に「イエス」という関所を越さないと、キャンプの活動は成り立たないのです。

窮屈で、参加者のニーズを狭めるようですが、実際にやってみると、全く逆で、安全に楽しくキャンプができるように工夫し、知恵を絞っているうちに、プログラムの幅が広がり、活気が生まれてくるのです。

#### ⑥キャンプの食事はスローフード

食生活をただと、子どもたちは生き生きしてきます。

キャンパーは自然の中でプログラムにできるだけたくさんの時間が取れるよう、食事を作るのに時間がかからないよう、油を使った料理を多くします。しかし、これからのキャンプは切り干し大根を朝から水につけて、夕食



に油揚げと一緒に炊くような、時間と手間をかける食事が大切です。

時間をかけて、心を込めて食事を作る、これがキャンプの食事の基本になるべきです。

### ⑦キャンプカウンセラーのリーダーシップ

生まれながらにしてリーダーシップを持っている人はいません。キャンプカウンセラーとは、リーダーシップを持ち、言葉で表せないような魅力のある人で、人付き合いがよく、気が利いて、おしゃべりが上手な人と思っている人があるでしょうが、本当に有能なキャンプカウンセラーは万事控えめな人柄の人が多いものです。リーダーシップの本質は、他に影響を与えるその人の内面の問題と解釈するべきです。

### ⑧キャンプ長の仕事は未来を見ること

グループカウンセラーは、今のグループの子どもたちを見、責任を持っています。プログラムディレクターは、今日の、あるいはこの期間のキャンプ全体を見て、判断をし、責任を負います。

キャンプ長は、今のキャンプのことはカウンセラーやプログラムディレクターに任せ、来年の、あるいはもっと先のキャンプを見ていなければなりません。

こうした文章の中から、私たちがキャンプの指導者として活動するために、忘れてはならない事柄いろいろ見出すことができる。

戦後の日本のキャンプの先駆者、小西孝彦の死に出会って、今一度、日本の組織キャンプの原点を確かめてみたい。

### 参考文献、引用文献

朝日新聞大阪厚生文化事業団 「創造と協同」 1954～1988

小西孝彦 「キャンプカウンセリング」 朝日新聞大阪厚生文化事業団 1966

小西孝彦 「組織キャンプ」 朝日新聞大阪厚生文化事業団 1967

朝日新聞大阪厚生文化事業団〔先駆〕55年の歩み 1984

石田易司編 「小西孝彦のキャンプの世界」 大阪府キャンプ協会 1993

日本キャンプ協会〔第1回日本キャンプ会議抄録集〕1997

編集委員会編 「アサヒキャンプの60年」 アサヒキャンプ 2013

畠中彬・石田易司編「小西孝彦さんに学ぶ」 大阪府キャンプ協会 2016

## Lessons Left by Takahiko Konishi, a Pioneer of Organized Camping in Japan

ISHIDA Yasunori

This paper discusses the achievements of the late Takahiko Konishi, who was one of Japan's most prominent camp leaders who were active after World War II, by referencing various materials, including his publications, the testimony of his acquaintances, and *Konishi Takahiko-san-ni Manabu* ("Learning from Takahiko Konishi"), which is a collection of writings compiled as a memorial to him.

Mr. Konishi had been involved in the field of organized camping for nearly 30 years, working as a camp counselor at Kobe Young Men's Christian Association (Kobe YMCA), a camp leader at the NPO Asahi Camp and a campground owner. He played a significant role in the creation of Japanese-style organized camping through his various activities. Among other things, he established an organized campground open to the general public as the first of its kind in Japan, held the nation's first camp program for people with special needs, produced house-shaped tents and "fresh-air" tents in Japan, and authored publications on organized camping.

Mr. Konishi sought to promote a movement to nurture young people—including not only children participating in camps but also student volunteers working as camp counselors—all without any expectation of compensation. He was also an advocate for respecting the rights of each individual, based on the idea of "Camping for All," i.e., that everyone can enjoy camping.

Keywords : organized camping, Asahi Camp, camps for children with special needs, "fresh-air" tents, creation and collaboration